

運動会はどこへいくのか？

東日本国際大学

篠原拓也

はじめに

コロナ禍の2021年、NHKによると、東京23区の小学校のうち約40%が、6月までに行う予定だった運動会を延期もしくは中止するに至った。運動会を実施した学校も、密を避けるために学年ごとに分けたり、体が接触する種目はなくしたりしたほか、開催時間を短縮したり、保護者や来賓を呼ばず児童だけで行ったりするなど、規模を縮小した。萩生田文部科学大臣は、運動会などの学校行事は子どもたちにとってかけがえのない思い出になる行事であるし、ワクチンの接種により秋口には少し景色が変わってくるという期待もあるとして、中止することなく、秋に延期するなど開催の可能性を検討するよう学校関係者に呼びかけている。

「運動会は中止でもオリンピックはやるのか」というネット記事も散見される。なるほどと思う。運動会とオリンピックを並べるのはまずもってスポーツ大会だからであろうが、筆者はそれ以上の意味があると思う。オリンピックには国際社会というマクロレベルの公共性があると思うが、運動会もまた地域社会というメゾレベルでの公共的な意味が残っているはずだからだ。しかもほとんどの人にとってオリンピックは視聴者としての公共性への関わりであるが、運動会は参加者としての関わりである。

本稿では運動会の歴史と文化に着目し、運動会の可能性について考えたい。

運動会の歴史

日本初の運動会は1874年（明治7年）の東京の海軍兵学寮で行われた。その後1878年に札幌農学校、1883年に東京大学で運動会が開催される。これはエリートたちが個人の運動能力を競う陸上競技大会という性質があった。

その後、全国の小中学校に運動会が広まっていくが、競技の内容が少し異なる。陸上競技が中心ではなく、旗奪い、綱引き、体操などの「兵式体操」が中心で、軍隊的な性質によっ

て個人より団体の競技が重視された。

ただし運動会は軍隊的な性質だけをもつものではない。運動会は地域ぐるみの行事で、地域の祝祭という性質も兼ねていた。当時の運動会は海辺や川原、神社など、学校の外で行っており、お花見や遠足のような雰囲気があった。もちろんこれにも軍事的な意味は付与されており、運動会のために学校から神社などに移動することは「行軍」とよばれた。運動会の成績に応じて賞品もあったが、はじめはそれほど効果がなく、あまり重要視されなかった。

1900年代以降になると各地で運動会の種目が急増する。例えば長野県では「敵陣占領」、「騎兵戦闘」、「俵送り競争」、「だるま落とし」、「棍棒体操」、「^{あれい}唾鈴体操」などが行われている。名前からしてやばそうな雰囲気の競技もある。

この1900年代以降には個人の競争意識も高まってくる。すると運動会は軍事演習というよりも、未来の軍人とはいえ、子どもたち個人の競争、試験という性質になっていく。個人の競争や試験をするとすると、個人の動きを精密に観察しなければならない。そこで、次第に運動会の場所は海辺や神社から学校の中へと移っていく。そして個人の競争、試験という性質が強まるにつれて、運動会の賞品の意味が重要になってくる。賞品をめぐる競争が激しくなってきたのだ。

しかし個人の競争という発想が強まりすぎると、軍事的に有用な集団の統一性まで損ねかねないし、賞品のための競争は虚栄心や卑劣さを生むとして、競争と団結のバランスが大事だと批判されるようになる。そこで学校は「体操を増やす」、「賞品の質を下げる」、「応援歌を作って応援を推奨する」、「団体競争に意識を集中させる」といった対応をとる。

すると今度はみんなが団体に関心をもつようになる。大きな団体のために小さな団体が必死に頑張り、小さな団体のために個人が必死に頑張る。運動会はもはや個人対抗ではなく、チーム対抗、学級対抗、学校対抗、市町村対抗と拡大する。

しかしそれでも運動会が地域のお花見やお祭りであるという側面はなかなか変わらなかった。学校のすぐ近くで賑わい、店まで出た。政府は何度もお祭り騒ぎを規制しようとしたし、お祭りになる運動会を批判する教育雑誌もあった。

こうして運動会というのは、その地域社会の生活感覚的な時間・空間と、近代国家を目指す政府が何とか地域に根づかせたい時間・空間がせめぎあって営まれてきた。また、昭和に入ると、学校に二宮金次郎像を建てまくったように、運動会にも資本主義の精神を根づかせ

る目的があったかもしれない。

戦争が終わると、個人が尊重され、能力を伸ばし、社会を創る一員となるための学校教育が行われる。そして現代に至っては、地域社会の絆の弱さが問題とされている。

運動会はどこへいくのか

さて、そうすると運動会の意義は、学校の完成や戦時体制、近年の地域社会の絆の弱まりを経て、地域社会のお祭りから学校内部の一行事へと、ぐっと矮小化されたと考えられる。今でも地域の運動会は、それはそれとしてあるが、学校の運動会とは分けてある。子どもたちが原則として全員参加するメインの運動会は学校内のものである。

実のところ、近年では、その学校内の運動会も批判にさらされている。コロナ禍とは関係なく、運動会の種目の不合理性、いやあるいは旧態依然として抑圧的な学校文化が批判されているのだ。特にマスコミで取り上げられてきたのは組体操の人間ピラミッドである。火付け役の内田良によると、中学3年生男子の場合、10段だと7mの高さになり、一番下の段の子どもの負担は200kgになる。ここまで高く重くならないとしても、4~5mで100kg程度になるような組み方は珍しくない。これが中学校だけでなく小学校や幼稚園でも行われている。

もちろんこれに対して、運動会が祝祭だとすれば、祝祭に合理性など求めるなどということもできる。しかしこれは大事故に繋がりがねないし、日本にピラミッド信仰などあったらどうか。人柱信仰はあったが、まさかそれだろうか。運動会は公共的な祝祭らしい雰囲気纏ってはいらぬものの、地域と断絶した学校の中だけでやるのだから、やはり単なる体育の授業の拡大版に過ぎないのではないか。そうならないように変なピラミッドをつくらせて、何か特別なことをしている感覚をもたせようとしているのかもしれない。とにかく、今どきの運動会にはそもそも祝祭性がないのだから、不合理なことをする理由はない。

一応、運動会は体育の授業ではなく「特別活動」の学校行事に位置づけられる。小中学校の学習指導要領の「特別活動」の第1の目標には「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ」とか「集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成する」とあり、社会という言葉が用いられている。学校行事の目的については「全校又は学年の児童で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公

共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」とある。

しかしながら「社会」や「公共の精神」に関する資質は、学校という聖域的な箱庭の中で達成されるのだろうか。あるいは、運動会の歴史がどうであれ、今の運動会にはそんな資質の獲得はいらぬのだろうか。

おわりに

つまり、事は特別な運動会をコロナからどう守るかとか、どのように with コロナの運動会をするかというよりは、運動会とは何で、だからどうするかという根本的なところから問うべき問題のように思える。

どのような形であれ、運動会はかけがえのない思い出になる行事なのであろう。その運動会が失われることへの危機感がある現在だからこそ、運動会そのものの公共的な意義や、翻ってあえて今日の運動会やそこにみられる学校文化にも眼差しを向けて、運動会の今後のあり方を問い直していく必要があると思う。

出典

NHK「萩生田文科相 運動会など学校行事 中止せず開催の可能性検討を」2021年5月18日、最終アクセス 2021.6.21

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210518/k10013037011000.html>

NHK「コロナ影響 小学校の運動会の4割近くが中止や延期 東京23区内」2021年6月14日、最終アクセス 2021.6.21

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210614/k10013084361000.html>

内田良（2017）『ブラック部活動——子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版社

吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史ほか（1999）『運動会と日本近代』青弓社